

Craftsman: 宮大工

福田 喜次 さん



漆塗りの金具も、全て落す前の屋台屋根。
左右が対象で、重木の配置も均等。見事な職人芸だ。

この世で一番祭が好き

何年経っても色褪せない“名屋台”を作る。

瀬のけんか祭りにて、鮮やかな緑のシダに囲まれた荘厳な屋台、木場。そんな木場の屋台を作った宮大工・福田さんは、木場でこれまでずっと屋台を練って来た練り子でもある。

「どんな腕利きの宮大工でも、祭りのことを知らなかったら屋台は作れん」屋台は、ただ豪華で大きいだけでは駄目なのだ。「たとえば、脇棒の長さが判らんで、不都合があれば来年までに切つたらいい」って、とりあえず長く作ったとする。もしその「とりあえず」が原因でケガ人が出たらどうする？そんなこと絶対あかん。納品する即ち、こしらえたその年に100%のものを納めるということ。巨大な屋台は、安全に練ることができんかったら練り子の命が危ない。もし不安なものを作るくらいなら最初から引き受けへん。断ることも責任。」屋台は、村同士の競い合いにより、年々派手に、そして巨大になっている。「屋台を新調するときは、だいたい以前より大きくしたいと申し出て来る。けど、その村がどんな道をどんな風に練るのかを知つた上で判断せなあかん。もしただ大きくして、祭り当日に屋台がどこかつかえて動けなくなつてしまつたらしたら、そんなもん職人として切腹せなあかんくらいの恥や。」福田さんは強く言い切る。

屋台の構造は、神社とほぼ同じ。寸分の狂いも許されない宮大工の手仕事である。「村人全員が施主。一人一人好みが違うのは当たり前やから、全員に気に入ってもらえるというのは無理。けど、気に入る気に入らんの前に、建築の基本は絶対守らなあかん。神様の前に持って行くもんを、あやふやにごまかしながら作られへん。あとは、それぞれの屋台に、「そこはそうしかんとうちの村のものとして認めへん」という伝統的なポイントがある。これを理解した上で作って初めて、好き嫌いを判断してもらえらる段階になる。」

見せていただいた写真の中には、「この世で一番の祭好き」と語る福田さんの練る姿も。祭りを愛してやまない職人が作った屋台は、一段と美しい輝きを放っている。



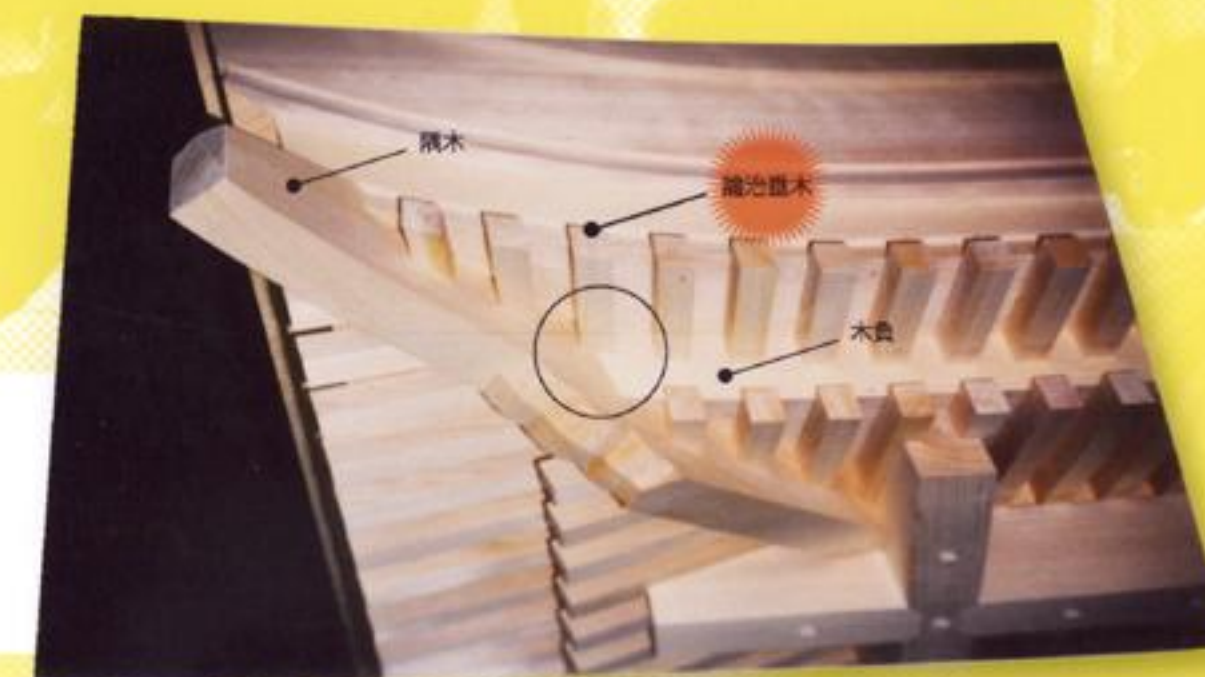
後に木造屋台となる木留。頼むほど名木だったという。



彫刻が施される前の正角



彫刻完成品
彫師：小河義保



社寺建築工法の要「輪治並木」

輪治並木とは葉車木と黒木、木貫が交わる点で、これがしっかり車木の半分のポイントにはまっていなければならない。たくさんの並木を均等に組む際に紙一枚分でも狂つたらこの技はかなわず、無理矢理組み合わせようとするとかえってガタガタになってしまう。名屋台の絶対条件なのだ。